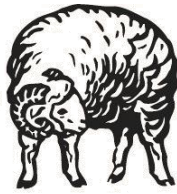


対話とコミュニケーションを考え
学術研究と市民知をつなぐ出版社

No.KD0282
2022年1月

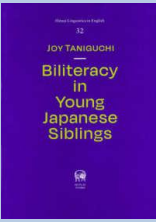










ひつじ書房

2022年1月 おすすめ新タイトル



NO	書影	書名	Product ID	出版社名	底本刊行年月	フォーマット	同時アクセス1 本体価	同時アクセス2 本体価	同時アクセス3 本体価
		著者	ISBN	内容紹介					
1		知を再構築する 異分野融合研究のためのテキストマイニング	KP00054705	ひつじ書房	202107	PDF	¥11,880	-	¥17,820
		内田諭 大賀哲 中藤哲也【編】	9784823410000	本書は異分野融合研究を実践するための方法論としてテキストマイニング（TM）に着目し、その基本的な仕組みや実際の研究事例を示したものである。基礎編ではTMの理論や手法等を紹介し、実践編では言語学、情報学、政治学、社会学、看護学、環境学など多様な分野の新進気鋭の研究者が、それぞれの分野におけるTMの実践的な研究例を提示する。執筆者：石田栄美、伊豆倉理江子、内田諭、大賀哲、加藤朋江、金岡麻希、川端亮、木下由美子、清野聡子、田中省作、土屋智行、中藤哲也、永崎研宣、畑島英史、秦正樹					
2		移住労働者の日本語習得は進むのか	KP00054717	ひつじ書房	202106	PDF	¥15,840	-	¥23,760
		吹原豊	9784823410963	日本語学習リソースへのアクセスが制限されている移住労働者の日本語習得過程はどのようなものか。本書は10年余におよぶフィールドワークと100名を超えるOPIによるデータをもとに、第二言語環境における移住労働者の日本語習得の過程を、日本の地域社会に存在する複数のコミュニティへ参加していく中での状況的学習としてとらえ、分析を行った研究の成果である。第二言語習得研究者はもとより広く在日外国人問題に関心のある読者に是非ご一読いただきたい。					
3		マンガ学からの言語研究	KP00055202	ひつじ書房	202103	PDF	¥11,550	-	¥17,325
		出原健一	9784823410482	認知言語学とマンガ学。一見、関連性がないように見えるが、実はどちらも「視点」がキーワードとなっている。認知言語学では主観的な視点と客観的な視点が主に議論されるが、マンガにはさらに多様な「視点」が存在する。本書ではマンガ学の視点概念を用いて、日本語のルビと英語の自由間接語法を中心に分析し、言語研究全般に援用できるよう新たな視点理論の提案を試みる。					
4		A Cognitive Linguistic Approach to Japanese Agrammatism	KP00055208	ひつじ書房	202103	PDF	¥30,360	-	¥45,540
		井原浩子	9784823410703	本書は日本語の失文法に見られる助詞「が」、「を」、「に」、「から」の誤用について、主に授受動詞や受動文を用いた産出実験結果に基づき、認知言語学の視点から説明を試みる。また、それらと類似した幾つかの現象（子供の言語獲得過程で見られる助詞の誤用、口語体における助詞の省略、健常者の言い誤りに見られる助詞の誤用）を取り上げ、失文法の場合と比較することから見いだせる共通性と相違が何に起因するのかを考察する。					
5		現代日本語の「ハズダ」の研究	KP00055209	ひつじ書房	202103	PDF	¥22,110	-	¥33,165
		朴天弘	9784823410833	現代日本語の「ハズダ」について、様々な用法を細く分類するだけでは、「ハズダ」の本質が見えにくくなる恐れがある。本書では、「話し手が持っている情報（知識）に対して、それに反する、またはギャップが感じられる状況が起きる場合」という「ハズダ」の使用条件を提示し、「知識確認」という機能が「ハズダ」の意味機能であることを新たに導入することで「ハズダ」の解釈に統一的な答えを見出した。					
6		述語と名詞句の相互関係から見た日本語連体修飾構造	KP00054714	ひつじ書房	202103	PDF	¥23,100	-	¥34,650
		三好伸芳	9784823410642	従来、連体修飾要素の機能は被修飾名詞句の指示性によって決定されるとされ、「定／不定」といった区別が素朴に連体修飾構造の分析に適用されることが多かった。しかし、実際には、そのような一般化に当てはまらない例が体系的に存在する。本書では、日本語の連体修飾構造に見られるさまざまな文法的振る舞いの包括的分析を通じ、連体修飾要素の機能、述語の内包性、名詞句の指示性といった意味論的な概念について、新たな理論的枠組みの提示を試みる。					
7		日本語複文構文の機能論的研究	KP00055203	ひつじ書房	202102	PDF	¥29,040	-	¥43,560
		田中寛	9784823410574	日本語の複文を構文の複合体としてとらえ、その談話環境及び展開の諸相を機能論的角度から論じた。ナラを始めとする条件構文の体系的見直し、動詞の接続辞表現、トアツテとニアツテ、タケニとタケアツテの意義づけを行うほか、ナカ時間節の事態誘導的機能に深く関与する点、形態的機能的に多岐にわたる比較・並列・対比表現の考察などを加える。『日本語複文表現の研究』、『複合辞からみた日本語文法の研究』に続く複文研究の集大成。					
8		壁塗り代換をはじめとする格体制の交替現象の研究	KP00055204	ひつじ書房	202102	PDF	¥19,140	-	¥28,710
		川野靖子	9784823410628	「壁にペンキを塗る／壁をペンキで塗る」のような格体制の交替現象は、壁塗り代換と呼ばれ広く知られているが、この現象はどのような仕組みで起こるのか。本書では、壁塗り代換とその関連現象を体系的に記述し、「意味類型の階層モデル」を用いて成立原理の統一的な説明を試みる。英語のlocative alternation研究との比較、ヴォイスや多義語との原理的な相違にも議論が及ぶ。一冊まるごと現代日本語の壁塗り代換を論じた、初の研究書。					
9		環大阪湾地域におけるアクセント変化の研究	KP00055205	ひつじ書房	202102	PDF	¥22,440	-	¥33,660
		山岡華菜子	9784823410635	京阪式アクセントはアクセント研究の中心をなしてきた分野であるが、その中心の京都から諸地域に範囲を広げると、あまり注目されてこなかった地域や興味深いアクセント変化が観察される。本書では、淡路、明石、鳴門、岸和田、和歌山県橋本、高知などの環大阪湾地域のアクセントやアクセント変化の傾向を、筆者の調査の結果を基に、アクセント史もふまえ明らかにする。また、その特徴を京阪式アクセントの史的変遷の上に位置づける。					

NO	書影	書名	Product ID	出版社名	底本刊行年月	フォーマット	同時アクセス1 本体価	同時アクセス2 本体価	同時アクセス3 本体価
		著者	ISBN	内容紹介					
10		Biliteracy in Young Japanese Siblings	KP00055206	ひつじ書房	202102	PDF	¥32,340	-	¥48,510
		谷口ジョイ	9784823410680	本書は、海外生活により複言語環境にあった日本語を母語とする子どもの第二言語能力が、帰国後どのように変化するかを、長期にわたり質的に記述したものである。帰国児童が海外で身につけた英語の能力を、リテラシーという観点から捉え、兄弟姉妹とその家族を継続的に調査、観察することで、保護者の意識、子どもたちの日常的なリテラシー活動、人的ネットワークなど子どもたちを取り巻く社会的要因について明らかにする。					
11		The Pragmatics of Clausal Conjunction	KP00055207	ひつじ書房	202102	PDF	¥32,340	-	¥48,510
		長辻幸	9784823410697	本書では、日英対照の視点から、節連言構造の解釈メカニズムの解明とそのモデル化により、当該現象の全体像における核心部を明らかにする。節レベルの要素を等位的な接続表現でつなぐ節連言構造として、英語のand連言文とそれに対応する日本語の複数の構造を認知語用論の枠組みに基づいて分析する。そのうえで、節連言構造の解釈に貢献する根本的な特性を抽出し、当該現象を統一的かつ包括的に説明できる新たなアプローチを示す。					
12		明治期の幼稚園教育と童話	KP00055210	ひつじ書房	202102	PDF	¥23,760	-	¥35,640
		北川公美子	9784823410840	日本の幼稚園教育の歴史の中で、童話との関係は深く、その初期から「談話・説話」の保育項目の中で取り上げられ、現在でも教材として重要な役割を担っている。本書では、そのような童話が、幼稚園教育の黎明期である明治期において、どのように保育の中へ導入され、受容されてきたかを、小学校教育や児童文学、及び社会状況との関わりを踏まえ、実証的に検証することにより、保育内容としての童話の成立過程の一端を明らかにした。					
13		日本語における短縮外来語の形成とその仕組み	KP00054713	ひつじ書房	202102	PDF	¥16,500	-	¥24,750
		文昶允	9784823410611	本書は、複合外来語を元にする短縮語形成（例えば「デジタル・カメラ」が「デジカメ」となる現象）の仕組みについて扱うものである。先行研究では、専ら理論的な分析がなされている一方で、その説明に実証的な裏付けは与えられていない。本書では、データベースの分析及び実験により、短縮語形成を制御する要因を明らかにする。具体的には、音韻的要因（首節構造や同音連続）に加え、言語使用者の選好傾向が影響していることを主張する。					
14		日本語学習者による多義語コロケーションの習得	KP00054715	ひつじ書房	202102	PDF	¥22,440	-	¥33,660
		大神智春	9784823410673	本書は、学習者が多義動詞「とる」を中心語とするコロケーションの習得過程において、どのような中間言語を形成しているか解明することを目的とした。研究に当たっては、学習者の中間言語を典型化、一般化、差異化の観点から複合的に捉えることを試みた。また、研究結果を日本語教育のコロケーション教材開発に活かすことを目指し、教材作成過程における留意点や練習問題の在り方等を提言した。					
15		明治・大正期国語科の成立と修身科との関わり	KP00054716	ひつじ書房	202102	PDF	¥20,460	-	¥30,690
		山本康治	9784823410758	明治・大正の教育は、忠君愛国とそれに基づく家族国家観の形成に向けて、修身科を頂点とした教育体系により展開していた。その中で文学教材は、修身科にあっては、「教訓・訓戒」のための題材として、国語教育実践の場においては、それらに抗う、児童主体の「想像」を重視した題材として扱われていった。本書では、当時の国語教育の実相を捉えるとともに、脱文学の方向性を示している現在の国語教育のあり方についても考察する。					
16		「させていただく」の語用論	KP00054712	ひつじ書房	202101	PDF	¥11,880	-	¥17,820
		椎名美智	9784823410567	「させていただく現象」の謎を解く。「させていただく」を言われて怒れる人がいる一方で、「させていただく」の氾濫はとどまるところを知らない。なぜ人は使いたくなり、何が違和感を生むのか？ この問いに答えるべく、意識調査で許容と違和の境界を探り、コーパス調査で発話行為的観点から他の授受表現との勢力関係変化を探った。それらをゴフマン的枠組みから再解釈することで、授受表現に生じているシフトに対する洞察を得た。					
17		発話の権利	KP00055200	ひつじ書房	202012	PDF	¥9,570	-	¥14,355
		定延利之【編】	9784894769830	車が動かないのは、運転手がペダルを踏み間違えているからである。それを見つければ車内の誰でも「あ、ブレーキ踏んでる！」と言える。だが、「あ、ブレーキ踏んでた！」は基本的に運転手しか言えない。この運転手の「特権性」はどこから、どのように生じるのか？ 語用論、会話分析、人類学、動物行動学の第一線の研究者たちの「答」がここにある。執筆者：木村大治、串田秀也、定延利之、園田浩司、高梨克也、中村美知夫、細馬宏通、村田和代					
18		認知言語学と談話機能言語学の有機的接点	KP00054704	ひつじ書房	202012	PDF	¥14,850	-	¥22,275
		中山俊秀 大谷直輝【編】	9784894769953	本書は、言語を実際の言語経験に基づいて形成される動的な知識体系として捉える用法基盤モデルを接点として認知言語学と談話機能言語学の有機的融合を図り、言語知識、言語獲得、言語運用に関する研究の新展開の可能性を示す。第1部と第2部で用法基盤モデルで想定される言語観を概観し、第3部では学際的な視点から行われた9つの研究を実例としてあげる。執筆者：岩崎勝一、大谷直輝、大野剛、木本幸憲、佐治伸郎、サドラー美澄、柴崎礼士郎、鈴木亮子、第十早織、巽智子、田村敏広、長屋尚典、中山俊秀、堀内ふみ野、松本善子、吉川正人					

NO	書影	書名	Product ID	出版社名	底本刊行年月	フォーマット	同時アクセス1 本体価	同時アクセス2 本体価	同時アクセス3 本体価
		著者	ISBN	内容紹介					
19		ナラティブ研究の可能性	KP00054706	ひつじ書房	202012	PDF	¥11,880	-	¥17,820
		秦かおり 村田和代【編】	9784823410062	本書は、多様なアプローチからの研究方法を用いてナラティブ（語り）を考察する実証研究論文9本とイントロダクションから構成される。様々な場所で、様々な人を相手に語られたナラティブを紐解くことで、そこに反映されている現代の価値観や社会規範を批判的に読み解き、それに基づく問題の所在とその解決を導くことをめざしている。執筆：相田慎、石原凌河、植田栄子、大場美和子、佐藤彰、秦かおり、村田和代、山口征孝、吉田悦子、饒平名尚子					
20		女性作家は捉え返す	KP00054711	ひつじ書房	202009	PDF	¥11,880	-	¥17,820
		西田谷洋	9784823410475	児童文学の女性作家たちはどのような物語を紡ぎ出したのだろうか。児童文学は一見子供向けとされるが、実際には別世界への飛翔だけでなく、時にメランコリックで無気力な人物を描き、死や記憶にまつわる物語が編まれていた。本書は、教科書教材に採用されることも多い安房直子・あまみきこ・小川洋子の作品と共に、吉本ばなな・山内マリコの小説、岡田麿里脚本のアニメ、香魚子の少女漫画を取り上げ、女性児童文学の様相を探る。					
21		言語と慣習性	KP00054707	ひつじ書房	202002	PDF	¥13,860	-	¥20,790
		土屋智行	9784823410109	本書は定型表現とその拡張用法の網羅的な記述・分析を通して、言語と慣習の関係を認知・社会的な側面から考察したものである。日本語慣用表現や諺をはじめとした定型性の高い表現を多く収集し、コーパス言語学の手法を用いて分析している。また「形式的変化を容認しにくい」と言われていた定型表現が様々な形式的変化を伴って使用されている事例を示し、定型的言語から創造性が発揮されるダイナミズムを理論的にまとめ上げている。					
22		近現代日本語の「誤用」と言語規範意識の研究	KP00054708	ひつじ書房	202002	PDF	¥21,450	-	¥32,175
		新野直哉	9784823410116	本書は、副詞“全然”に関する昭和10～20年代を中心とした学界・一般社会双方における規範意識の考察や、現代日本語における「誤用」の定番例として知られている“気がおけない”・“世間ずれ”・“名前負け”等の使用実態と言語規範意識についての考察を行い、さらに昭和戦前～20年代の日本語の実態とそれに関する言語規範意識の研究に役立つ新資料の紹介およびそれを用いた研究の実例をも示したものである。					
23		英語中間構文の研究	KP00054709	ひつじ書房	202002	PDF	¥23,760	-	¥35,640
		吉村公宏	9784823410130	理論を問わず、英語中間構文は人気のあるテーマである。しかしながら、看過されてきた問いは、能動と受動の中間がなぜ「属性」を表現するのか、そのときの属性とはそもそも何か、という根源的な問いである。本書は伝統文法、生成文法、認知文法の研究成果を総括し、上記の問いに認知意味論的視点から切り込む。多数の実例データを駆使しつつ、新しい説明原理によってその本質に迫る。認知意味論・語彙・構文・語法の研究者には必見の一冊である。					
24		漫画に見られる話しことばの研究	KP00054710	ひつじ書房	202002	PDF	¥16,500	-	¥24,750
		福池秋水	9784823410154	東京を中心とした首都圏の話しことばは、首都圏方言と呼ばれ、多くのドラマ、漫画などの作品で用いられるほか、日本語の会話教育でも取り入れられることがある。本書では、主に漫画作品を対象として、ラ行音の撥音化（わからない→わかんない）等、首都圏方言の表現のゆれがどのように使分けられているかに関する観察を行った。日本語学習者の表現の幅を広げる支援を行うための基礎研究となることを目指す。					
25		江戸語資料としての後期咄本の研究	KP00054703	ひつじ書房	201912	PDF	¥29,040	-	¥43,560
		三原裕子	9784894769595	従来、後期咄本は江戸語資料としての価値を認められることが少なかった。しかし一方で、当時既に古臭さ・尊大さを想起させる「ござる」、婉曲な拒絶を表す「一昨日来い」等の様々な実例が見られ、市井の会話が得られる資料と言える。本書はこれらの実例から〈表記変化を促すもの〉〈類型化と使用層の変化〉等、表記・語彙・語法他の視点から、江戸語が上方語的要素を脱し、独自の発展を遂げた変化の要因を論じるものである。					
26		合理的なものの詩学	KP00055201	ひつじ書房	201911	PDF	¥18,480	-	¥27,720
		加藤夢三	9784823410253	近現代日本文学の書き手たちは、同時代の理論物理学やその周辺領域の学知に、どのような思考の可能性を見いだしていたのか。「合理的なもの」の見方を突き詰めていたはずの作家たちの方法意識が、時として「非合理的」な情念へと転化するのはどうしてなのか。本書は、その総合的な表現営為のありようを検討することを通じて、モダニズムの文芸思潮から今日のサイエンス・フィクションにいたるまでの芸術様式の系譜を再考することを試みたものである。					